

「平成の政治改革」を考える(3)

平野 貞夫
元参議院議員

この国はよいへ——公明党の責任は重い

「毎日新聞」の7月14日付夕刊の「特集ワイド」に、久しぶりで登場した。テーマは「この国はどこへ、これだけは言いたい」とのインタビュー記事であった。記者の狙いは平成時代の「政治改革」を、小沢一郎衆院議員の元で活動した私が、87歳でこの世に残っているということ、言い残したいことがあれば言っておけという取材であった。

内容は、私が高知県生まれで吉田茂元首相や又従兄弟の林義治元衆院議長との関係で、自民党で「宏池会」という政策集団を主宰した池田勇元首相の薫陶を受けたこと。さらに池田勇人の心友で、宏池会の理念と政策をまとめた戦後の政治家で一番の学識者であった前尾繁三郎元衆院議長と、私が運命的な出会いをして3年8カ月にわたって秘書を務め、さまざまの重要な

政治的局面の裏表に立ち会ってきた、そうした政治経験に基づいて現下の政治状況に物申せということだ。

本誌の先月号では、ロッキード事件の騒動の渦中に、昭和天皇のご意向を受けて前尾元議長が、「核不拡散条約」の国会承認を実現させた政治家であったことを書いたが、毎日の記者は、池田・前尾という「宏池会」の首脳は、「宏池会」創設の時、この国の政治をどうする信念であったのか、という質問から始まった。

私は「前尾さんは、時間があるときは語り継いで欲しかったんだろう。昔話をよく聞かされた」として、1959(昭和34)年、60年安保の前年に「宏池会」を準備している時、池田・前尾の話し合いの中で「岸信介首相の影響を受けた政権をつくらせないためだ」と聞いた。これは表に出せないことだとの話をした。

この時の二人の考え方は「憲法9条を護ろう」で一致していたと思う。ところが、岸田文雄首相は就任以

前は、いかにも9条護憲であるかのような発言をしていて、首相となるや「任期中に憲法改正したい」と言い出す。内閣に「憲法改正案が提出できるかどうか」法律論争があることを知っているのか。岸田首相の頭の中はどうなっているのか、総理大臣としての見識がない。連立の公明党の責任は重大だ。

記者が「宏池会設立時の政治理念について何か話を聞いていませんか」と迫ってくる。そういう理論は前尾さんが研究していたということで、何度も聞いた。池田さんが喜んでくれたという理論は、「政治は、現実と権力の上に立たなければならぬ。しかし、理想と正義を忘れたら、もはや政治ではない」ということだった。いまの現職の国会議員で何人が、これを理解できるかねえ。これだけは言いたい。の本音であった。

前尾衆院議長時代と公明党

1973(昭和48)年5月に、前尾さんは衆院議長に就任する。田中角栄内閣時代で、前年の12月に総選挙があり、共産党が40名の野党第2党に躍進。田中首相が共産党対策のため「小選挙区制とする」と発言し大混乱となる。事態を收拾した中村梅吉衆院議長が「野党を騙した」と放言して、議長を辞めた後任であ

った。国民に「政治不信が強い時期」であり、前尾さんは持論の「議長党籍離脱」を条件に、無所属の議長として就任した。

与野党どの党派も前尾議長を支援しないという中で、秘書の私は佐藤栄作内閣からの公明党との付き合いの関係もあり、伏木和雄国対委員長と大久保直彦参議院議員運営委員会理事に、前尾議長の話相手になってほしいと頼んだ。すると大久保理事が「付き合いの切っ掛けに色紙をもらえないか」とのこと、前尾議長は「中は天下の正道なり」という中国の格言を色紙にして贈った。

その時期、公明党は政治姿勢のキャッチフレーズとして「中道政治」を検討していた。驚いたのは公明党で、「前尾議長は公明党の政治姿勢と同じ考えだ」となる。前尾議長は漢学や語源学の専門家である。公明党の自民党と社会党を足して中を採るという意味ではない。物事や採め事の矛盾の核に正義や倫理があるとの意味だ。理屈はともかく、池田大作創価学会会長と同じぐらい公明党は前尾議長を大事にしてくれた。私が困ったのは公明党国会議員から、引つ切りなしに色紙を頼まれた対応であった。

1974(昭和49)年には、共産党と創価学会の

「共創協定」が調印され、翌年に発表されるという時代だった。この流れは前尾議長が共産党の議会主義への理解を評価したり、国会改革に共産党が協力するという流れになる。野党第一党の社会党も民社党も、公明・共産を追っかけるように、前尾議長を大事にするようになった。

自民党は「青嵐会」が、田中首相の「日中友好正常化」を批判し、前尾議長の野党寄りの国会運営を批判する動きをした。現在の国会の劣化を見るに、別の国のように思える。当時の前尾衆院議長と河野謙三参院議長は、国民から内閣総理大臣より尊敬され、国会への国民の信頼は高かった。その原因の一つに公明党の健全性を指摘できる。

衆院事務局退職と参院選出馬の裏事情

公明党の「中道政治論」は、それなりに世論から支持を受けて1970年代の伯仲国会で活動を続けていた。衆院事務局で国会運営の事務を続けていた私は、各党から要請があれば公正誠実に対応した。前尾議長秘書の関係から公明党との関係が目立った。さらに田中角栄元首相が「ロッキード事件」の被告で裁判中に、小沢一郎議員が衆院議員運営委員長を2年2期に

進党)準備会代表と秋谷栄之助創価学会会長の会談が行われた。新進党に公明党を参加させるかどうかの協議である。2日後の10月30日、秋谷会長から私に電話があり、池田名誉会長からの小沢代表への伝言を託された。ポイントは「(小沢・秋谷)会談は、一步、信義を深める内容になっていて、10年後の秘話にすべき内容になっていきます。歴史的な意義のある会談でした」(以下略)

公明党の新進党への参加が確実となった伝言である。これにより公明党は衆院では直ちに解消する。参院議員と地方議員は順次、公明党を新党に合流させることを決定した。「新進党」を結成させ、一大政党による新しい政治体制を作った歴史的意義は大きい。

この歴史的な決定に裏話がある。権藤恒夫公明党衆院議員から聞いた池田名誉会長の呟きだ。

「人を出して金を使って公明党をつくって、これほど世間から悪口を言われるとは、かなわん。最近多くの国民は憲法の信教の自由の本旨を理解するようになった。創価学会に政党は必要でない。われわれは歴史的意義を終えたのだ……」と。

しかし、私が聴いた池田名誉会長の「10年後の秘話」は、秘話にならなかった。2年後の96(平成8)

わたり勤めた。その時、私が議院運営委員会担当課長であった。

一部の政治家や記者から、私の姿勢を「公明党の裏国対」とか、「小沢の裏方」などと批判された。実際は、国会運営の正論を主張して、議論というより口論が多かった。その時期の公明党や小沢さんとの関係は、相当に誤解されているようだったので、1985(昭和60)年から92(平成4)年頃まで、日記をつけていた。京都大学の憲法と政治学の学者が興味をもち「平野貞夫衆院事務局日記」として、信山社から出版している。

政治改革をめぐって、梶山静六自民党国対委員長と衝突し、私は事務局勤務は無理となる。92年7月の参院選挙で高知地方区から「保守系無所属」で立候補した。与党の自民党と野党の公明党が本部推薦。民社党が県連推薦、社会党系では解放同盟が亡き父に世話になったと推薦、共産党が宮本顕治議長の指示で「平野には世話になった」と四万十川から西(私の故郷)は自由投票という変わった選挙で国政に出ることになる。

亡国化する公明党の政治と政策

1994(平成6)年10月28日、小沢一郎新党(新

年には、自民党の創価学会への憎悪と熾烈な攻撃は、新進党との本格的な闘争を視野に橋本龍太郎自社と政権を誕生させ、その橋本政権が98(平成10)年の参院選で惨敗し退陣すると、過去の創価学会と暴力団の関係をネタに、「恐喝行為」ばりの工作で公明党に新進党離脱を強要。その結果、公明党そして創価学会は自民党の軍門に下り、新進党を離脱して、自・自・公政権さらには今日に続く自公政権に参画した。

池田名誉会長の「10年後の秘話」は夢と消えた。そして10年を経た2005(平成17)年には、復活した公明党は、岸信介政治を継ぐ自民党・清和会の小泉純一郎政権と手を結んだ。そして新自由主義を標榜する小泉政権下で社会保障費を削り、イラクへの自衛隊派遣に協力。その後継で岸信介を尊敬する岸の孫の安倍晋三政権では、憲法違反の安保法制などに協力し、議会制民主主義を危殆に瀕せしめた。

さらに宏池会の心を放棄した「岸田政権」では、非核政策を無視、防衛費倍増に賛同。最悪なことには武器輸出三原則を骨抜きにして「殺傷能力」のある武器の輸出まで容認した。これは政治論として「殺人予備罪」行為だ。平和と福祉の公明党は、完全に国民を裏切っている。